

## 専任教員の講義

### 平成 29 年度 西洋史学講義 担当：教授 南川 高志

「西洋史学講義」は、これから西洋史学を学ぼうとする文学部 2 回生にとっての入門講義「西洋史学序説」であり、他の学問を専攻する者にとっては歴史学の方法を学び、歴史的思考力を養成するという授業である。授業は専任教員が交代しておこなってきているが、昨年度は私の担当であった。私がこの授業を担当するのはこれがおそらく在職最後になるだろうことは承知していた。しかし、授業の性格上、特別の内容とするのではなく、これまで担当してきたときの内容と大筋を変えず、他の教員が担当する場合にもなされるのと同じように、史学史を中心に講義した。

通年科目授業であるが、前・後期を明確に別け、前期は日本における西洋史研究の歩みを講じた。まず 1970 年代に登場し注目された「社会史」について、研究論文等を紹介しつつその内容を解説し、私の専門である古代ローマ史分野における社会史研究の成果も紹介した。次いで、時代をさかのぼって、明治以来の西洋史研究の歩みをいわゆる「戦後史学」まで解説し、大塚史学とそれへの批判など、社会史登場までの学界の有り様を説明した。さらに、「社会史」を経た 1990 年代以降の日本の西洋史学界の動向も紹介し、21 世紀の初頭という時点で、日本で西洋史の研究をおこなうことの意義と立場についても論じた。

後期は、ヨーロッパにおける歴史研究と歴史叙述の歩みを古代から現代まで解説した。私の専門が西洋古代史であるため、古代ギリシア人とローマ人の歴史研究や歴史叙述に多くの時間を費やしたが、中世・近世を経て 19 世紀の近代歴史学の成立、アナル派の歴史学など、20 世紀末までの欧米の歴史学の歩みをたどった。最後に、現代における歴史学の課題と意義について担当者なりの見解を提示した。

### 平成 29 年度 西洋古代史演習 担当：教授 南川 高志

昨年度の西洋古代史演習は、古代ギリシア・ローマ世界とその外部との関係、および古代世界の一体化を問題とした。キイ・タームは「グローバル化」であった。まず K. Vlassopoulos, *Greeks and Barbarians*, Cambridge UP, 2013 の序章と第 6 章：Globalisation and glocalisation を読み、ギリシア人と他者との関係を古代地中海地域における globalisation と glocalisation の経過において考える議論を学んだ。そして、その成果を踏まえて、主テキストである M. Pitts and M. J. Versluys (eds.), *Globalisation and the Roman World: World History, Connectivity and Material Culture*, Cambridge UP, 2015 の検討をおこなった。

この論文集は、ローマ考古学研究を先鋭な形で展開しているグループが、「グローバル化」をローマ帝国に使用できるかどうか検討しようとした 2 度の研究集会を踏まえて刊行したもので、2 編のきわめて示唆に富む序論的論文と 9 編の個別論文から成る。執筆者にはローマ史研究者でも考古学者でもない、「グローバル化」の専門家も含まれている。

本演習では以前に、R. Hingley, *Globalizing Roman Culture. Unity, Diversity and Empire*, Routledge, 2005 をテキストとしたことがあったが、このたびの論文集は、ローマ帝国の理解に「グローバル化」概念が有効であるとする論者だけでなく、この概念の古代世界への適用に批判的な者の論文も含まれており、議論が立体的に浮かび上がってくるように作られている。そもそも考古学者たちが「グローバル化」を古代世界に使おうと考えたのは、帝国主義の時代に F・ハヴァフィールドが文明化の意味を込めて使い始めた「ローマ化」概念を批判し、新しい議論の地平を開こうとしたからであった。そして、本書は全体として、ローマ帝国を「グローバル化」の概念で捉えることに有効性を認めている。

演習を通じて、考古学者たちの熱のこもった議論に学ぶところは多かったものの、ローマ化であれグローバル化であれ、概念やそれに基づく議論は生み出された時代の影響を深く受けていると認識することが大事だと強く感じられた。そして、そこにこそ歴史学者の本領が発揮できる歴史の枢要があるとも思われた。

#### 平成 29 年度 西洋史学特殊講義 担当：教授 小山 哲

平成 29 年度は、「もうひとつの宗教改革——ポーランド・リトアニア共和国における宗教と社会」というテーマで特殊講義をおこなった。テーマを立てるにあたって 2017 年がルターの宗教改革 500 周年にあたることは念頭においていたが、私自身の意図としては、記念の年に便乗するというよりも、この機会に、ドイツよりも東に位置する地域の視座から近世のヨーロッパ宗教社会史を展望することは可能か、もし可能であるとすればドイツからみる宗教改革史とどのように異なる図柄が描けるのか、といったことを考えてみたかったのである。

ヨーロッパ東部の視点からみると、「ルターの宗教改革」を世界史上の一大転換点とみなす歴史観自体、かならずしも自明のものではない。ポーランド・リトアニアでは、東西両教会の併存、ユダヤ教徒やイスラーム教徒との共存などの理由から、宗教的な一体性は、ルターの改革のはるか以前からすでに存在していなかった。信仰の分裂がルターの改革にはじまるものでなかったとすれば、いわゆる「宗教改革」はポーランド・リトアニアの社会に何をもたらしたのであろうか。この講義では、ポーランドの宗教改革を複数形 (Polish Reformation(s)) でとらえる近年の研究動向から示唆をえながら、ルターの改革とは異なる潮流——とくにエラスムスの影響と反三位一体派の運動の展開——に焦点をあてて、宗教社会史上のいくつかのトピックについて解説を加えた。

当初の予定では、リトアニアからの視点も重要であると考え、都市ヴィリニウス（ヴィルノ）における諸宗教・諸宗派共存の実態についても話をするつもりであったが、時間が足りず果たせなかった。シラバスで予告していたとおりの内容を講義することができなかったことについて、受講生にお詫びしなければならない。

講義を準備する過程で H. シリングの宗派化論についても疑問が生じたので、講義のなか

で若干の論及を試みた。論点の一部は、『東欧史研究』第40号（2018年3月）に掲載された拙論「多宗派の共和国——近世ポーランド・リトアニア共和国における諸宗派共存体制とその変容」でとりあげているので、関心のある方はご参照いただければ幸いである。

平成29年度 西洋近世史演習 担当：教授 小山 哲

昨年度の近世史演習では、前期と後期に、それぞれ異なるテーマのテキストを題材としてとりあげた。前期の授業でとりあげたのは、J. Daybell and S. Norrhem (eds.), *Gender and Political Culture in Early Modern Europe, 1400 – 1800*, Routledge: London and New York, 2017 である。近世ヨーロッパにおける広義の「政治」(politics) をジェンダー論的な視角から再考することを意図して編まれた論文集で、序論と結論を含めて全12章からなる。編者2名による序論(第1・2章)に続いて、以下のテーマを掲げた4部が設定されている。「外交、贈与と交換の政治」(第3・4章)、「社会経済的構造、ジェンダー、政治」(第5～7章)、「宮廷における女性たちとジェンダー化された政治」(第8・9章)、「投票と政治的代表＝表象」(第10・11章)。「グローバルな展望」と題された結論は、M. ヴィースナー・ハンクスが執筆している。具体的には、近世史料の生成・保管にみられるジェンダー的な偏り(第2章)、女性による書簡や贈り物の交換が外交におよぼす影響(第3・4章)、寡婦による土地の相続や経営(第5・7章)、地域や家族のネットワークにおける姉妹関係の機能(第6章)、宮廷政治における女性の役割(第8・9章)、選挙の過程で女性はどうのような影響をおよぼしたか(第10・11章)といった問題がとりあげられている。扱われている地域は西欧と北欧で、編者の1人がスウェーデンの研究者であることから、北欧の事例が比較的多くとりあげられている点が特徴的である。論文集にはよくあることだが、全体の統一性にやや欠けるところがあり、「政治文化」のとらえ方についても執筆者のあいだに差異があるという印象を受けた。とはいえ、本論集を通読すると、史料の読み方やテーマの設定を工夫することによって、これまで見えにくかった政治の世界への女性の深い関わりを可視化できることがよくわかる。本演習の受講生の1人がこの論集の論文からヒントをえて卒業論文を執筆したことも、担当教員としてうれしかったことの1つである。

後期には、*The American Historical Review* 誌上のフォーラム“Mapping the Republic of Letters”(Volume 122, Issue 2, April 2017, pp. 339-463) をとりあげた。このフォーラムでは、プリンストン大学を拠点とするプロジェクト「文芸共和国をマッピングする」の内容を紹介しながら、近世ヨーロッパの文化史研究の分野で数量化と地図化がどこまで、どのように有効でありうるかが議論されている。ビッグ・データと歴史学の将来については、J. Guldi and D. Armitage, *The History Manifesto*, Cambridge 2014 (日本語訳：J. グルディ、D. アーミテイジ(平田雅博・細川道久訳)『これが歴史だ！ 21世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017年)でもとりあげられており、デジタル文化のなかで育った若い世代の院生・学生諸君の考え方・感じ方を知りたい、というアナログ世代の担当教員の興味もあって、題材としてとりあげてみた。近世ヨ

ヨーロッパの知識人の文通や旅行について、手紙や旅の内容を問題にせずに、ひたすら日付と宛先や滞在地を入力してビッグ・データ化していく手法については、受講生のあいだで賛否両論があった。このような研究は、デジタル技術の専門家を含むチームを組まないといけないし、研究成果の公表についても、インターネット上でのデータベースの公開や、わかりやすくデザインされた地図や図表の掲載など、学術雑誌への論文の発表を中心とする従来のやり方とは異なるスタイルが求められる。ヨーロッパ近世史の史料に含まれる「質」にかかわる情報と「量」として処理しうる情報との関係をどう考えるか、という問題については、今後も演習の授業のなかで折にふれて議論していきたいと考えている。

#### 平成 29 年度 西洋史学特殊講義 担当：教授 金澤 周作

前期は「セーブ・ザ・チルドレンと第一次世界大戦後のヨーロッパ」と題した講義を行った。セーブ・ザ・チルドレン（SCF、1919 年～）という巨大な国際 NGO 組織が、なぜ、第一次世界大戦後のイギリスで誕生したのかという問いを出発点にして、まずはチャリティ史と人道主義史を接合すべく、近年注目されているトランスナショナル・ヒストリーの文脈の中で研究動向の整理を行った。その上で、この組織の創設者エグランタイン・ジェブ（Eglantyne Jebb、1876-1928 年）の生涯を、既存の伝記研究をもとに詳しく紹介した。とくに史料を用いて分析したのは、戦時中に彼女が関わった『ケンブリッジ・マガジン』の「外国記事抜粋」コーナー（イギリスにとって不都合な記事の翻訳・紹介）と、戦後、ナショナリズムとインターナショナリズムの間を巧みに進む SCF の機関誌上における宣伝の諸相、そして病没直前にジェブが記した、生涯を悔恨のうちに回顧した覚書である。

後期は「18・19 世紀におけるバルバリア国家との捕囚返還交渉」を講義した。近世の地中海世界でヨーロッパ諸国とその船にとって頭痛の種であったアルジェ、トリポリ、チュニス、モロッコ王国によるヨーロッパ船の拿捕の実態を、近年の研究にもとづいて解説した。一説によれば、1530-1780 年の期間、約 100 万人のキリスト教徒が北アフリカで捕囚となった（逆に、多数のムスリムがキリスト教世界で捕囚となった）。この捕囚を買い戻すために身代金を支払う際、誰がどのように金を集め、どのような回路で解放条件を交渉し、どの程度自由を得られたのかを先行研究にもとづいて検討すると、スペイン、イタリア、フランス、ハンザ諸都市、デンマーク、オランダでそれぞれ異なる特徴を確認することができた。その上で、18 世紀初頭にイギリスで創設された、捕囚救出を目的とする財団「ベットンのチャリティ」の活動（特に 19 世紀初頭の事例）を、史料を用いて再構成し、同国の特質を考究した。

#### 平成 29 年度 西洋近代史演習 担当：教授 金澤 周作

例年通り、前期に英語の研究書を通読した。ここ数年、グローバル・ヒストリーやトラン

スナショナル・ヒストリーの優れた実践例と思われる作品を選定してきたが、今回取り上げたテキストは、Abigail Green and Vincent Viaene (eds.), *Religious Internationals in the Modern World: Globalization and Faith Communities since 1750* (Palgrave Macmillan, 2012)である。グローバル化の進む現代世界において宗教の果たす役割の大きさは、近年ますます強く認識されるようになってきている。近代化の理念の一つである「市民社会」は、かならずしも世俗性を特徴とはしないし、ネイション単位で構成されるわけでも、西欧だけに看取されるわけでもない。そのことを明瞭に示すのが、19世紀、20世紀に世界各地で展開した、信仰を同じくする人々のネットワーク（教会、セクト、結社など）、すなわち本書のタイトルが言うところの「宗教インターナショナル」である（この用語はもちろん、同時期に展開した、信条を同じくする人々のネットワーク、「社会主義インターナショナル」を踏まえている）。

この卓抜な切り口から、本論集は、キリスト教（プロテスタント、カトリック、正教）、ユダヤ教、イスラーム教、仏教やヒンドゥー教の「インターナショナル」を俎上にあげる。扱う領域は、西ヨーロッパ、北米のみならず、東欧・ロシア、バルカン、北アフリカ、中東、インド、台湾、日本にも及び、世俗化や工業化、西欧の脅威、貧困や迫害、ナショナリズムといった危機／チャンスに対処する信仰を持つ人々の苦闘を活写している。

ヨーロッパにも近代にもとどまらないテーマが頻出する本書の読解は易しくはなかったが、大学院生たちはよく議論をリードしてくれたし、学部生たちは鋭い指摘をしてくれた。また、毎回、読んだ論文の指し示す歴史像を黒板一杯に図示し、批判的に検討する作業を続けた。西洋近代史を然るべくグローバリゼーションの文脈の中に位置付ける思考態度を身につける上では、受講生諸君にとって得るところの多いものであったと考えている。